最優秀賞

農林水産大臣賞

牛とともに山を守る酪農 小さく始めて持続する 経営モデル

花坂 薫さん
神奈川県足柄上郡山北町

「牛の力を借りて、山づくりをしたい」。
そんな思いから神奈川県山北町へ移住し、県内初となる“山地酪農”に挑戦した花坂薫さん。放牧から加工・販売までを一貫して行う独自の経営で、高付加価値化と持続可能な農業を実現してきた。女性就農者の育成や地域の山林保全にも力を注ぎ、2024年には神奈川県女性農業者活躍表彰・県知事賞を受賞。小さな規模だからこそ生まれる、新しい酪農のかたちが注目を集めている。

岩手で芽生えた、山と牛への思い

高校時代、牛乳が好きで一日に1リットル飲んでいたという花坂さん。食品製造への関心から大学へ進学し、在学中に出会った書籍『黒い牛乳』が人生を動かした。「牛の力を借りて山を作る酪農」。その考えに強く惹かれ、岩手県の中洞牧場で4年半働いた。乳製品製造の責任者を任されながら、休日には放牧や山の管理を学び、「いつか自分も山地酪農を」と思いを深めていった。

地域に入ることから始めた就農

2016年、山北町へ移住。牧場跡地は地域共有の財産で、住民の理解が不可欠だった。草刈りや行事に参加し、顔を合わせ、時間をかけて信頼を築いた。「地域の活性化のためにも期待している」。その言葉に背中を押され、2018年、ジャージー牛5頭とともに牧場を開いた。中洞氏から贈られた「転んだら起きろ。俺の背中を見ろ」という言葉は、今も支えになっている。

小さくても、続けられる経営を

放牧主体の山地酪農は効率重視の酪農とは異なる。だが、少頭数でも加工・販売まで一貫して行うことで、家族が暮らせる収入を生み出せることを示してきた。ソフトクリームや低温殺菌牛乳は評判を呼び、コロナ禍ではクラウドファンディングで多くの支援を受けた。「一人ではできなかった」。人とのつながりが経営を支えている。

次の担い手へ、経験を手渡す

現在は夫と、移住者の若い女性と共に牧場を運営している。静岡で独立した女性就農者には牛を譲り、飼養管理の相談にも継続して応じている。放牧から加工までを担う女性の一貫経営は全国的にも珍しい。「自分の経験が、誰かの一歩につながれば」。そんな思いで、研修や見学も受け入れている。

未来へ向けた決意

「牛の力を借りて山づくりをしたい」。その原点は、今も変わりません。牛が草を食べ、根を張るノシバが土を守ります。災害に強い山を育てるこの営みを、特別な事例ではなく“当たり前の選択肢”にしたいと考えています。今後は、足柄茶を使った加工品の開発など、地域資源を生かした取り組みも進めていきます。山と人、そして牛が共に生きる風景を、次の世代へ手渡していきます。

評価のポイント

- 大規模化が進む酪農分野において、山地酪農という新たな手法に挑戦
- 放牧を通じて山の管理につなげる「牛の力を借りて山づくり」という独自の取り組み

優秀賞

経営局長賞

想像力で広げていく りんご農業の 新しいかたち

歯科助手や農産物販売業を経て、知人からりんご園を継承し就農した佐藤恵美さん。
子育て中の自身の暮らしを起点にした柔軟な働き方と、創意工夫あふれる商品づくりで、りんご栽培に新たな可能性を広げている。

佐藤 恵美さん（株式会社SATO FARM）
青森県西津軽郡鰺ヶ沢町

農業を避けてきた理由と、見方が変わったきっかけ

水稲農家に生まれた佐藤さんは、収入の不安定さや災害への不安、忙しい両親の姿を見て育った経験から、農業に関わらない人生を選び、歯科助手として働いてきた。転機となったのは、父や知人の勧めで始めた地元農産物の販売業である。商品の差別化や経営管理を学ぶ中で、「農業は工夫次第で可能性が広がる仕事かもしれない」と感じるようになった。さらに夫が大豆農家として就農し、家族の時間を大切にしながら堅実に経営する姿を間近で見たことが、農業への見方を大きく変えていった。

ゼロから始めた、りんご農家への挑戦

令和2年、りんご園の継承先を探していた知人から声をかけられ、りんご農家への転身を決意。「megumi farm」を立ち上げ、栽培技術や防除、出荷先の確保まで、すべてを手探りで進めた。周囲の農家に教えを請い、失敗を重ねながらも経営の安定化を図ってきた。令和5年には夫の経営と統合し、「株式会社SATO FARM」を設立。現在は代表取締役として、りんご部門を担っている。

「私スタイル」が生んだ、働く人の輪

子育て中で長時間働けない自身の状況から、佐藤さんは生活リズムを大切にした「私スタイル」の働き方を確立。フレックスタイム制や30分刻みの時給、急な休みにも対応する柔軟な雇用条件を整えた。その結果、働きたくても条件が合わなかった子育て世代の女性を中心に人が集まり、現在は22人が登録。労働力の確保とともに栽培面積は約1.3haから3haへ拡大し、販売額も就農当初の2.5倍に成長している。

創造力で広げる、りんごの楽しみ方

規格外や小玉りんごをどう生かすかという課題に対し、販売業の経験を生かした発想で新商品を開発。変形りんごに表情シールを貼った「ぺたぺたりんご」や、メッセージ動画が見られる「QRりんご」は、消費者の心をつかんだ。さらに自作の絵本『りんごって？』を用いた読み聞かせや農業体験を通じて、子どもたちに農業の楽しさを伝えている。活動は県内外へ広がり、多くの共感を集めている。

未来へ向けた決意

目指すのは、「佐藤恵美のりんごなら間違いない」と信頼される存在になることです。その言葉に応えられる品質と姿勢を、日々の仕事の中で丁寧に築いていきます。環境に配慮した栽培に取り組みながら、農業体験や食育活動もさらに充実させていきます。次の世代が職業の選択肢として農業を選べるよう、今できることを一つずつ実践していきます。

自作絵本

評価のポイント

- 農地を譲り受ける形での新規就農と、自身のキャリアを生かした取り組み
- フレックスタイム制やりんご作業の省力化により、子育て世代の女性を中心に雇用を確保し、規模拡大につなげている点
- 「QRりんご」や自作絵本など、創造性とオリジナリティを生かした食育活動

優秀賞 水産庁長官賞

海と人をつなぎ直す 蒲江から始まる 水産業の新しい挑戦

水本 あゆみさん
大分県佐伯市

水産大学校で学び、漁師と結婚したことをきっかけに、消費者から生産者へと立場を変えた水本あゆみさん。担い手不足や魚離れといった水産業の課題に直面しながら、現場に根ざした工夫と発信力で、蒲江の海と水産業の価値を次世代へつなぐ取り組みを続けている。

消費者から生産者へ　海の現場に立つ決意

水産大学校で学んだ水本さんは、縁あって漁師と結婚し、天然カワハギ稚魚の採捕・育成を行う夫の事業拡大を機に、2019年から共に漁業に携わるようになった。消費者として魚を選んでいた立場から、生産者として海と向き合う日々へ。漁師町ならではの暮らしや魚の魅力をSNSで発信すると、多くの共感を集め、次第に水産業の現状や課題を「伝える役割」を自覚するようになった。

仲間に救われ、地域に恩返しする覚悟

赤潮やウイルスの蔓延により、カワハギ稚魚が全滅しかねない危機に直面したこともあった。廃業の瀬戸際で支えとなったのは、漁師仲間の存在だった。この経験をきっかけに、「蒲江の水産業を守り、支えてくれた人たちに恩返しがしたい」との思いを強くする。2021年には水産庁の「海の宝！水産女子プロジェクト」に参加し、大分県でただ一人の水産女子として、全国の仲間と学び合いながら活動を広げていった。

データと連携で切り開いた経営改善

事業拡大の壁となったのは、育成環境の悪化と慢性的な人手不足だった。2024年には潮通しの良い西浦湾へ漁場を移設し、過去の日誌や経理データを分析。給餌方法や管理手法を見直し、成長段階に応じたマニュアルを整備した。さらに、水産業では珍しい水福連携にも挑戦し、B型就労支援事業所へ給餌作業の一部を委託。人手不足の解消と作業効率向上を同時に実現し、生産量と売上はV字回復を果たした。

次世代へつなぐ、海の学びと誇り

2024年には若手女性漁業者による任意団体「KAMAEおさかな研究女子会」を立ち上げ、保育園での食育活動を開始。魚に触れ、育てる仕事を知る体験を通じて、子どもたちに水産業を身近に感じてもらう取り組みを行っている。また、女性向け漁業資材の商品化やSNS発信を通じ、漁業に関わる人の裾野を広げる役割も担っている。

未来へ向けた決意

これからは、繁忙期の安定した人手確保や養殖筏の規模拡大に取り組み、生産量と品質の安定化を図っていきます。あわせて、福祉施設や地域人材と連携し、担い手を育てる仕組みづくりにも力を入れていきます。「KAMAEおさかな研究女子会」の活動を広げ、食育や情報発信を通じて水産業の魅力を伝えながら、蒲江の水産業を次の世代につないでいきます。

評価のポイント

- 売上データの分析や労務管理の見直しにより、経営の安定化と売上を向上させた点
- 「ＫＡＭＡＥ～会」の立ち上げと、地域水産業のPRや食育活動への継続的な取り組み
- 水福連携など新たな協働モデルを実践し、水産業の将来をリード

優良賞 大日本水産会長賞

価値を見出した“ゴールド海苔”という発想

松本 理絵さん
佐賀県鹿島市

「一枚の海苔も、無駄にしたくない」。
親子三代にわたり佐賀県有明海で海苔養殖を営む松本理絵さんは、近年深刻化する海苔の色落ちという課題に真正面から向き合ってきた。
見た目だけで価値を失い、廃棄されてきた海苔に新たな光を当て、商品開発や食育活動へとつなげる取り組みは、海と地域、そして次の世代を結ぶ力となっている。

「海苔の色落ち頻発」という現実

松本さん一家は、代々有明海で海苔養殖を営んできた。香り高く、やわらかで口どけの良い佐賀のりづくりに誇りを持つ一方、近年は海域の栄養不足などの影響で、黒く色づかない「海苔の色落ち」が頻発している。収穫しても市場に出せず、廃棄される海苔も少なくない現状に、「本当に捨てるしかないのか」という疑問を抱いたことが、取り組みの出発点だった。

「ゴールド海苔」と名付け、価値を見直す

色落ち海苔の成分を調べると、栄養価は決して劣っていないことが分かった。そこで松本さんは、この海苔を「ゴールド海苔」と名付け、新たな価値を見出す商品開発に踏み出した。
「海苔は黒いものが良い」という固定観念や、地元業者の理解を得る難しさもあったが、粘り強く声をかけ、共感してくれる企業との連携が実現。海苔石鹸やゴマサブレ、キャンディなど、これまでにない商品が次々と誕生している。

廃棄を減らし、環境と経営の両立へ

かつては年間約26万枚もの色落ち海苔を廃棄していたが、取り組みにより活用量は着実に増加した。廃棄処分にかかっていた費用を削減できただけでなく、得られた収入を次期設備の購入に充てられるようになった。廃棄時の燃料の使用量も減り、環境負荷の軽減にもつながっている。

体験を通じて、海の現状と大切さを伝える

色落ち海苔の現状を知ってもらうため、松本さんは「海苔ふりかけ作り体験」を考案した。色落ち海苔に好みの具材を加える体験は、保育園や小学校、駅構内の催事などで好評を博している。2022年には妹とともに「のりのりシスターズ」を立ち上げ、活動を本格化。現在は「ふるさと先生」として子どもたちに有明海の話をする機会も増え、令和6年度は37回、令和7年度はすでに42回実施するなど、県内外へと活動が広がっている。

未来へ向けた決意

まずは、自社で発生する色落ち海苔の廃棄ゼロを実現したいと考えています。つぎに、地域で生じる色落ち海苔も買い取り、地域全体の収入向上につなげていくことを目指しています。これらが海苔養殖業者の減少に歯止めをかける力になると考えています。
「一枚の海苔をきっかけに、海苔だけでなく一次産業が抱える課題にも目を向けてもらえたらうれしい」。海とともに生きる産業の未来を見据え、これからも取り組みを続けていきます。

評価のポイント

- 有明海の海苔不作・色落ち問題を、独自の発想で商品化につなげた点
- 「一枚の海苔も無駄にしない」という理念のもと、廃棄削減とSDGsを実践した取り組み
- 商品開発や体験活動を通じ、海の環境や食文化を伝える食育活動の継続

優良賞

農山漁村男女共同参画推進協議会長賞

里山の美しさと恵みで地域を元気に

「病気にならないためには、日々の食が大切だと思った」。デザインと保健師の経験を持つ稗苗史絵さんは、中山間地域で米づくりに向き合いながら、加工・直売部門「のろしファームキッチン」を立ち上げた。食べることを通して、人と地域が元気になる。その思いが、里山に新しい流れを生み出している。

稗苗 史絵さん
富山県魚津市

異分野の経験が、農業へ

非農家出身の史絵さんは、短大で産業デザインを学び、企業で産業保健師として働いてきた。働く人の健康を支える中で、「予防には、毎日の食が何より大切だ」と実感するようになる。
そんな頃、自然栽培で米づくりに取り組む稗苗良太さんと出会い、その姿勢や思いに共感。2015年、結婚を機に農業の世界へと足を踏み入れた。

米のおいしさを、別のかたちで届けたい

北アルプスの雪解け水が流れ込む里山で育てた自社米は、食味コンクールで高い評価を受けている。「このお米を、もっと身近に感じてもらえたら」。
そう考えた史絵さんは、保健師としての視点を生かし、米粉を使った「おやき」の開発に取り組んだ。減塩で卵は使わず、腹持ちがよく、忙しい日でも手軽に食べられるおやきは、健康を意識する人たちの支持を集めた。

土地を知ってもらう場所づくり

コロナ禍を経て、「里山の美しさを知ってもらうには、やはり、来てもらいたい」と感じた史絵さんは、実店舗の開設を決意する。それが、「のろしファームキッチン」だ。おにぎりを軸に、地元食材を使った商品を提供し、直売スペースでは地域内外の農業者の商品も扱った。訪れた人が、食べて、話して、地域を知る。そんな交流の場として、少しずつ人が集うようになった。

地域農業を支える役割へ

2019年には農業委員に就任。中山間地域で進む担い手不足や農地集積に向き合い、女性の立場から意見を伝えてきた。また、加工・直売部門では若いスタッフの育成にも力を注ぎ、チームで経営を支える体制づくりを進めている。

未来へ向けた決意

食を通じて地域の魅力を伝え、顧客確保につなげることで、経営の安定を図っていきます。また、地域を支えてきた先人の思いや技を次の世代へつなぐ役割も果たしながら、地域を元気にしていきたいと考えています。一次産業全体の未来も見据え、活動を続けていきます。

評価のポイント

- 水稲栽培から「ミスターおやき」やおにぎりの製造・販売までを一体的に行っている取り組み
- デザイン力を生かした商品開発により、里山の魅力を発信している点
- 農業委員として地域と関わり、食や地域資源の継承に取り組んでいること

最優秀賞

農林水産大臣賞

花とスイカで人を笑顔にする全員が主役の園芸経営

「私たちが育てた花とスイカで、人に幸せや心の豊かさを届けたい」。瀬戸内の温暖な気候に恵まれた因島で、花苗と野菜苗の生産を続けてきた株式会社ジョージア園芸。女性も含めスタッフ全員が主役となる職場づくりを掲げ、現場から生まれるアイデアを事業へと育ててきた。花と人、そして地域を結ぶ取り組みが、島に新しい風景を生み出している。

株式会社ジョージア園芸
広島県尾道市

因島の気候とともに育つ園芸経営

株式会社ジョージア園芸は、瀬戸内海に浮かぶ因島で花苗と野菜苗の生産を行ってきた。温暖な気候を生かし、多品目を安定して供給することで、ホームセンターなどとの直接取引を中心に規模を拡大してきた。2022年の法人化を機に、「女性が主役となれる職場づくり」を会社の方針として明確に掲げ、農業法人として新たな一歩を踏み出した。

スタッフの主体性が育つ環境をつくる

農業の現場には力仕事も多い。そこで作業工程を細分化し、種まき、鉢上げ、土づくり、寄せ植えなどを担当制とし、女性従業員がリーダーとして責任を担える体制を整えた。かつては「社長の指示」を待つ場面も多かったが、現在は女性チーフが主体的に判断し、現場をまとめている。従業員は自分たちで育てる花苗やスイカの品質改善にも積極的に関わり、分からないことを自ら調べ、工夫を重ねてきた。その結果、作業効率が向上するとともに、職場には一体感が生まれている。こうした積み重ねが、女性も男性も誇りを持って活躍できる職場づくりにつながっている。

花に想いをのせる、ブリコラージュフラワー事業

専務・村上理衣さんが主導するブリコラージュフラワー事業は、現場の女性たちの感性を生かした挑戦だ。寄せ植えレッスンの開催や商品開発、販売ツールの整備を通じて直販など新たな販路を開拓してきた。「自分たちで育てた花が、こんな形で人を笑顔にする」。その実感が、仕事へのやりがいと自信を生んでいる。

花と農業で、地域とつながる

同社は小学校やこども園と連携し、花植え活動や栽培指導を行っている。子どもたちが自分で育てた花で入学式や卒業式を彩る取り組みは、地域に温かな循環をもたらした。さらに因島特産のスイカ栽培にも着手し、地元カフェと連携した商品提案を実施。花と農産物を通じて、地域の魅力発信にも力を入れている。

未来へ向けた決意

花とスイカで人を笑顔にする島へ。ジョージア園芸が目指すのは、「因島は花とスイカで人を笑顔にする島」として広く認知される未来です。今後は女性リーダーの育成やブリコラージュフラワー事業の拡大、因島スイカのブランド化を進めていきます。女性が誇りを持って働き、地域とともに成長する農業のかたちを、これからも因島から発信していきます。

評価のポイント

- 農業法人として「女性が主役となれる職場づくり」を会社の方針として明確に掲げ、現場の仕組みづくりにも落とし込んだこと
- 現場の女性たちの感性を活かした事業は、会社だけでなく地域貢献にもつながっている点

農山漁村女性活躍表彰
[発行者;運営主体]株式会社　マイファーム
〒600-8216 京都府京都市下京東小路町607番地 気日ビル1階
TEL:050-5527-2841　MAIL:mfaward_r04@myfarm.co.jp

農山漁村男女共同参画推進協議会
[事務局]一般社団法人 全国農樂協同組合中央会 営農・担い手支援部
一般社団法人 全国農業会議所 経営対策部
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル２階
(一社)全国農業会議所内　TEL:03-6910-1124　FAX:03-3265-5140
https://www.nca.or.jp/support/farmers/common/

農山漁村男女共同画推進協議会とは…・

農山漁村女性の社会参画及び経営参画を推進し、男女共同参画社会の実現に取り組む任意団体です。
【構成団体】JA全国女性組織協議会／一般社団法人全国農業会議所／一般社団法人全国農業改良普及支援協会
全国林業研究グループ連絡協議会女性会議／全国漁協女性部連絡協議会／公益社団法人日本農業法人協会

本資料は、農林水産省補助事業「令和７年度担い手育成・確保等対策事業費補助金等（女性が変える未来の農業推進事業）」の一環として制作しました。